保育者養成校における子育て支援の取り組み

～活動内容の検討～

塚本久仁佳

(釧路短期大学幼児教育学科)

キーワード：子育て支援 保育者養成校

A Report on Childcare Support for Mothers Through Activities Involving Students of a Nursery Teachers' School

Kunika TSUKAMOTO

(Kushiro Junior College)

Key Words: childcare support nursery teachers' school

目 的

少子化といわれる近年、子育て支援の必要性が更に高まっている。核家族化の進展や、身近に子育てをしている人がいないなど子育て環境が変化しているため、子育てを支援していくことが求められるようになってきた。

子育ては親だけが担うものではない。地域で支えていくものである。幼稚園教育要領や保育所保育指針においては、幼稚園や保育所も、通園している乳幼児に対する子育て支援だけでなく、地域の子育てを支援していくことが明記されている。そして、幼稚園や保育所のみならず、市町村が実施主体となる子育て支援センターなど、様々な子育て支援事業が地域の中で展開されている。

子育て支援には決まった形態があるものではない。それぞれの特色を生かしながら、必要とされる支援を提供し、支援のネットワークを広げていくことが望ましい。保育者養成校による支援としては、札幌大谷大学短期大学部において、子育て支援センターとして、つどいの広場の開設など7つの事業を行うなど(大西他, 2008)、様々な取り組みが行われている。保育者養成校の利点は、子どもにかかわる大人の人数が多いということである。筆者はその利点を生かして、学生が子どもの託児を行うという試みを行っている(塚本, 2011)。

本研究は、これまで筆者が行った子育て支援の取り組みから、学生による子育て支援の活動内容について検討することを目的とする。

方 法

- (1)日時：平成22～24年度の講義期間における木曜（実習期間などを除く）15時～17時。
- (2)対象：未就学児の親子（保護者は子どもと一緒にいても、外出しても良い）。
- (3)対象人数：託児の場合は、1対1で対応できるように10名までとし、保護者同伴の場合と合わせて20名以下とした。
- (4)活動内容：子どもの保育を行い、必要に応じて保護者の話を聞いたり助言を行った。
- (5)スタッフ：釧路短期大学幼児教育学科子育て支援ゼミの学生（2年生）、保育士、担当教員（臨床心理士）
- (6)場所：釧路短期大学附属幼稚園または体育館など
- (7)保育体制：託児を行うにあたり、保健所の基準に準拠することとし、安全については細心の注意を払うように努め、保険にも加入した。学生は専任の保育士や教員の指示のもとに子どもとかかわることとした。
- (8)相談体制：保育士および臨床心理士が対応する。あらたまって相談を受けるのではなく、いつでも相談を受けることとした。
- (9)料金：利用料金は無料。保険料金も大学が負担した。
- (10)準備：学生が託児を行うにあたり、子育て支援センターや保育所などで研修を行った。

結 果

1年目は、集団での活動に重点を置き、自由遊びのあとに、全体で行う設定保育の時間を設けた。集団での活動が難しいと予測された子どもにとっては、集団活動の練習の場となり、集団保育へと繋がっていたケースが数ケースあった。2年目は、少人数の親子が継続的に参加した。子どもが少人数である分、学生が保護者とのコミュニケーションをとることが可能となり、子育てについて学ぶ場となるとともに、親同士の繋がりをもつ機会ともなった。3年目は、託児を中心に行い、一人ひとりの子どもに寄り添った遊びを行った。

参加した保護者からは全体的に「親子ともに楽しめた」という感想が多かったが、1年目は「何をするのか楽しみ」「集団での様子を見られて良かった」、2年目は「親同士話ができて良かった」「心配なことが話せて良かった」、3年目は「夕食づくりなど、自分の時間がもて良かった」「親もリラックスできました」などとそれぞれの活動内容に沿うような感想が見られた。

考 察

学生にとってはどの活動であっても学びの機会となり、実際に親子にかかわることによって、子どもの発達について、子育てについて理解を深める場となっていた。免許や資格を取得するためには、保育施設での実習が必須であるが、保護者とかかわる機会は少ない。本研究の中で、学生が保護者とコミュニケーションをとるという経験ができたことは、子育て中の親の気持ちを知るという有意義な機会であったと考えられる。

保護者にとっては、自分の時間がもてたらそれで良いという訳でもなく、子どもが楽しんでいる姿を見たり、他の保護者等と子育てについて話ができる時間となることが良かったという声が多かった。従って、どのような活動内容が良いというよりも、保護者が安心して過ごす時間を設定することに意義があったと言える。そのためには、子どもが安心して過ごせることが前提となるため、本活動は、子ども一人ひとりに合った遊びを提供したり、子どもの様子を丁寧にみていくことができるという、保育者養成校ならではの子育て支援の一形態であると言える。

地域における子育て支援ネットワークの充実が求められている今、保育者養成校の特色を生かして、さらに何ができるのか今後も検討していきたい。

引用文献

- 大西 道子・星 信子・清水 郁太郎・桑野 敏明・柘植 純一・入江 明美・戸田 竜也・山田 智子(2008) 札幌大谷大学短期大学部子育て支援センターの設置の経緯と利用の実績 札幌大谷短期大学紀要, **38**, 37-67
 塚本 久仁佳(2011) 保育者養成校における子育て支援の試み—未就学児の託児を通して— 釧路短期大学紀要, **38**, 1-6